

高校における「通訳訓練法」を取り入れた言語教育の効果と展望

越智 美江

(聖カタリナ女子高等学校)

This paper proposes a pedagogical model for high school English classes using interpreting training methods, and analyzes the effectiveness and prospect of the methods as part of the English education in Japanese senior high schools. Although the effectiveness and the interest in incorporating interpretation methods have been increasing in the language programs of Japanese universities, there are still few high schools that have started using the methods. Nothing has been established in terms of methodologies, evaluations and instructors' training. This paper is a case report of senior high school English classes using some of the basic interpreting training methods. The major aim of my practice is to enhance students' ability in the acquisition of listening, speaking, reading, and writing skills through the methods. A two-year implementation proved that there are a lot of benefits, bringing energy, vitality, changes, interaction and concentration into the classroom activities, yet there are several pedagogical issues that have to be considered and improved. This paper concludes with practical suggestions for the remaining issues and the future prospect concerning teaching English through interpreting training methods.

1. はじめに

高校における英語教育の多くは、水の中で泳がせないで泳ぎ方の説明のみをするスイミングスクールのように感じてきた。そんな思いを吹き飛ばしてくれたのが、「通訳訓練法」を取り入れた言語学習法だ。本稿において通訳訓練法による具体的指導法の提案と、実践結果の分析を通し、その効果および今後の展望の考察をしていく。英語教育の一環として通訳訓練を行う傾向は大学では増加の一途をたどっているが(鳥飼 1997)、高校の英語教育の現場では通訳訓練法を利用した言語学習法はあまり取り入れられていないのが実情だ。指導方法・評価法・指導者の育成等、議論もなされておらず、高校におけるこの言語学習法はまだ未知数である。

OCHI Yoshie, "The effectiveness and prospect of interpreting training methods as part of language education in Japanese senior high schools."

Interpretation Studies, No. 5, December 2005, Pages 203-224

(c) 2005 by the Japan Association for Interpretation Studies

通訳訓練法を用い、身体を使うことで言葉を習得していくこの一連の体験的言語学習を、スポーツをした後に得られる達成感や爽快さの類似より、筆者は「スポーツイングリッシュ」と名付けている。この訓練法を高校の授業に取り入れた主な目的は英語の4技能を高めることであったが、さらに、英語の授業に活気・活力・集中力・相互作用をもたらすという波及効果もみられる。一方、大学受験に対応しうる語彙数を獲得し、600～700語の長文を一気に読み英語での質問に短時間で答えられるか、英語長文を読む場合、学習者の頭の中に日本語の和訳内容のみが残ってしまうのではないかと、という危惧も残る。その対処法についても考察する。

本稿は、筆者が平成2年度より教えている高校での通訳訓練法を利用した授業の分析結果を通し、英語の運用能力を高めるために有効であろうと思われる指導法の提案をするとともに、今後の方向性を展望するものである。

2. 授業概要

2.1 対象クラス

本校特進国際コース2年生の2004年度「英語」の授業での実践例を紹介する。約10ヶ月間にわたり、毎週4回50分の授業を行った。本校には普通科・看護科・商業科の3科があり、普通科には5コース設置されているが、その中の1つのコースである。

2.2 指導目標

体全体で英語を読み・聞き・話し・書く。言語活動中心でリズムがあるテンポのよい授業を行う。英文のinputを与え、それらをintakeにまで高め、outputを引き出す。授業を5ラウンドに区切り、1ラウンド終わると次に進む、さまざまなタスクを用意しておき集中力を持続させる。具体的目標は以下の通りである。

- 自然な日本語で文頭から訳出していける。
- 和訳を見ながら英語で内容を再生できる。
- 学習した英文を要約できる。
- シャドーイング練習を通し、英語のイントネーション、ストレス、リズム、ポーズ等への対応力を身につける。
- ディクテーション練習を通じて英語の保持・再生能力を高める。

2.3 対象生徒の構成

対象生徒は普通科2年特進国際コースの33名で、うち1名はニュージーランドからの留学生である。1年終了時には実用英検2級に1名(3%)の生徒が合格している。実用英検準2級には16名(50%)の生徒が合格している。1年時3学期、2004年2月13日に受験したTOEICの最高得点は455点、最低得点は225点、平均スコアは298点であった。

2.4 使用教材

この授業で使用した主要テキストは、文部科学省検定本である『ワールドトレック』である。また補助教材として『リスニングパイロット』（東京書籍）および*NEWSBREAKS FOR BASIC English Learners*（エミル出版）を用いた。

2.4.1 教材選定の基準

通訳訓練法を利用するため、教材選定にあたり以下の点に配慮した。

- 音声教材が添付されている。
- 内容が多岐にわたっている。
- 内容があまり難解すぎない。
- リスニング教材ではスクリプトが生徒一人ひとりに提供されている。
- リスニング教材では段階を追って習得できるよう構成されている。

2.5 授業展開

授業の主体は文部科学省検定本を使用したものであるが、リスニング、ディクテーション、表現力強化のために補助教材も使用しているが、検定本の授業展開を中心に紹介する。活用した通訳訓練法としては、以下のものが挙げられる。

- 訳語の確認発音練習
- 語句のクイックレスポンス練習（ペアワーク）
- シンクロ・リーディング
- スラッシュ・リーディング
- サイト・トランスレーション
- 日英・英日サイト・トランスレーション通訳練習（ペアワーク）
- シャドーイング

2.5.1 『ワールドトレック』授業展開

文部科学省検定本である本テキストは比較的内容が易しく、しかも分野が多岐にわたっており、背景知識の収集なども行いながら1課の教材を6時間から7時間で終わらせている。1課が700語から800語で構成されており、それが3パートに分けられている。通常の和訳授業であれば内容を和訳し、英文は音読1回か2回で終わりということになるが、1パートを2時間かけ、通訳訓練法を取り入れた授業を行う。

1時間目（語彙・文法・内容理解）

予習

- 新出単熟語とグラマーポイントを調べる。
- シンクロ・リーディング

- スラッシュ・リーディング
- センスグループ単位で文頭から訳出し、ノートに書き留める。

授業

- 新出単熟語の訳語確認・発音練習
- ペアワークで語句のクイックレスポンス練習 1分ずつ。
- 3ペアがクラスの前でデモンストレーション。
- パラグラフごと CD を聞かせ、日本語で内容に関する質問をし、日本語で答えさせ、内容の大意を把握させる。
- センスグループごとに文頭から訳出させ、構文・文法の解説を入れる。

2 時間目

予習

- 一人通訳練習（サイト・トランスレーション）日 英・英 日
- シャドーイング
- リプロダクション練習またはリード&ライト 2回

授業

- 新出単熟語の日本語訳出を横黒板に書き出しておいたものを見ながら英語で発音練習（全体から個へ）
- フリーライティング（5分間手を止めず、消さず、読み返さず前回習った内容を英語で書く）
- パラグラフごとに CD を聞かせ、英語で内容に関する質問をし、英語で答えさせる。テキストは見ない（時には列対抗で行う）。
- シンクロリーディング 2回
- シャドーイング 2回
- 音読またはリードアンドルックアップ
- ヘッドフォンを装着し、シャドーイングを数名の生徒に発表させる。
- 日英・英日サイト・トランスレーション通訳（ペアワークで3分ずつ）
- 3ペアがクラスの前でデモンストレーション。

2.5.2 『リスニングパイロット』

平成 18 年度大学入試より、センター試験でリスニングテスト 50 点分が導入されることになった。その準備のために導入した教材だが、ただリスニング力をつけるだけでなく、ディクテーションを通し、何が聞き取れてないかを明確にし output までもっていくことを狙いとしている。

短期目標としては、1 年後に実施されるセンター試験の日程にあわせて 2 年次に校内で実施するセンター試験リスニング・コンピューター診断テスト（Listening Pilot

Level 3 付随)において8割以上解けることを目指す。

長期的目標は、英検2級・準1級合格、TOEICで高得点取得を視野に入れるとともに、リスニングを継続して行なうことで集中力を養成し、脳内での英文処理速度の高速化をも目指す。

2.5.3 NEWSBREAKS FOR BASIC English Learners

本書は、国内外で話題になっているニューストピックをやさしい英語で紹介しているテキストである。ポップカルチャーも含まれており、一度は耳にしたことのあるニュースがほとんどで、関心を持って取り組める。投げ込み教材として月1回から2回使用した。簡単な英語でのオーラルイントロダクションの後CDを2回聞き、メモを取る。4人でグループを作り、メモを基にどんな内容であったか英語で順番にレポートする。次に、英文スクリプトを配布し、内容を確認し、英語でマインドマップを作る。マインドマップを見ながらグループ内で内容を英語で今度はできるだけ正確に伝える。

この活動の目標は、日本語では背景知識をある程度知っている内容の英語をまず耳からinputすることで集中力を養成し、リスニング力を高める。スクリプトで内容を理解・確認し、英語でintakeする。そして英語でoutputすることだ。

このアプローチによる言語習得プロセスはもっと実践を通じた検証が必要で、今後の研究課題としたい。また、マインドマップをいかに活用していくかも掘り下げていきたい分野だ。

2.6 評価

高校で通常年5回実施している定期テストに加え、2005年1月22日にTOEICテストを受験、2004年6月、10月および2005年1月に実用英語検定を受験した。

3. 学習者の英語力の伸びと反応

通訳訓練法を授業に取り入れた対象生徒の英語力がどのように伸びていったか、さらに、学生が通訳訓練法を取り入れた授業を受ける過程でどのような変化があったか、またどのような感想を持ったかを知るため、最終授業を終えた後「アンケート」を実施した。

3.1 通訳訓練法導入前・後における対象生徒の英語力

1年次は日本の高校で一般的に行われている文法訳読法の授業を生徒は受けてきている。前述のとおり、対象生徒は1年終了時には実用英検2級に1名(3%)が合格している。実用英検準2級には16名(50%)の生徒が合格している。1年次3学期、2004年2月13日に受験したTOEICの最高得点は455点、最低得点は225点、平均スコ

アは 298 点であった。

通訳訓練法を授業に取り入れた 2 年次 3 学期、2005 年 1 月 22 日に受けた TOEIC の最高得点は 665 点、最低得点は 200 点、平均スコアは 369 点であった。2 年終了時には、実用英検 2 級に 4 名 (12%) の生徒が合格、実用英検準 2 級には全員の生徒が合格した。

3.2 2 年終了時のアンケート調査

2 年の授業終了後に生徒が通訳訓練法の授業をどのように感じているかを知るためアンケート調査を実施した。アンケートの内容およびその結果は巻末に参考資料として添付した (pp.222-224)。

3.2.1 通訳訓練法で学んでよかったと感じる点について (アンケート項目 C)

通訳訓練法で学んでよかったと感じる点についての回答は記述形式とした。全員の生徒が前向きな感想を書いている。類似回答はまとめてみたが、以下の通りである。

- 英語を聞きながらいちいち日本語に訳さず、そのまま英語で理解しやすくなった。
- 普段耳にしない単語を抵抗なく、聞けるようになった。
- シャドーイングは練習するにつれ上手になり、リスニングに役立つ。
- 内容理解が速くなり、分かりやすくなった。
- 英語を耳にする時、無意識のうちに訳そうとしている。
- 長い文でも区切って訳せるので訳がしやすくなった。
- 前からどんどん訳せるようになり長文読解に役立っている
- スピードに慣れるので読むのが楽しくなり、やる気がでた。
- 単語が自然に口に出るまで声に出して覚えたので授業以外でもスッと出るようになった。
- 1 年の時からやっておけばよかった。
- ペアワークで互いに語彙力がつくのがよかった。
- 何回も声に出すので、すぐ単語や文法を覚えることができた。
- 口から素直に英語が出るようになった。
- まじめに英語を勉強するようになった。
- 授業があつという間に終わり、楽しくなった。

3.2.2 「一人通訳」について (アンケート項目 A)

サイトラ練習のことを「一人通訳」と名づけていたが、「初めて」という生徒が 81.8% と、大多数を占めた (表 1)。3% の生徒が「予備校」で、3% の生徒が「NHK ラジオ英会話」で、3% の生徒が「中学」で習ったと回答した。

一人通訳のどんな点が難しいと感じるかについて尋ねたが、「英文を見て日本語がすぐ出てこない」点を挙げた生徒が 54.5%を占めた。「文頭から訳す作業」に慣れてないと感じている生徒が 18.2%いた（表 2）。

一人通訳練習をしてどんな効果があったと思うかという問いに関しては、「意味の区切りが分かるようになった」が 54.5%で一番多く、「単語力がついた」も 45.5%と多かった。「英文が速く読めるようになった」と回答した生徒は 18.2%いた（表 3）。

3.2.3 シャドーイングについて

シャドーイングに関する調査では、「初めて経験した」と答えた生徒が 93.9%で、「中学の時の英会話レッスン」と回答した生徒が 3%、「NHK ラジオ英会話」でも 3%であった。ほとんどの生徒にとって初めての体験となったようだ（表 4）。

次に、シャドーイング練習でどんな点が難しいと感じたかについてはさまざまな回答が予想されたが、「正確に話す」と「スピードについていく」がいずれも 63.3%で大半を占めた。「聞きながら話す」という作業も生徒にとっては難しく 27.3%の生徒が回答している。また、「英語を聞き取る」こと自体が難しいと感じた生徒は 18.2%いた（表 5）。

練習回数については、クラスの前でヘッドフォンを着けてデモンストレーションする機会があることと、宿題として出していたこともあり、54.5%の生徒が「週 3 回」練習していた。「ほぼ毎日」練習した生徒が 18.2%いた。「週 1 回」の生徒と同数であった（表 6）。

シャドーイングがすらすら上手にできるからといって必ずしも英語の成績が良いとは限らないのも面白い結果だった。データとしては採ってないが、シャドーイングの上手さと英語の成績はおおむね正比例の相関関係があることは確かだ。

また、シャドーイング練習でどんな効果があったと思っているだろうか。「スピードについていけるようになった」が最も多く 54.5%であった。「聞き取りやすくなった」が 27.3%で、「英語を声にだして話すことに抵抗がなくなった」と「発音が少しよくなったような気がする」が 18.2%であった（表 7）。

4. 通訳訓練法を用いた授業の具体例と分析

使用した教材の中から英文を抜粋し、通訳訓練法をどのように生徒は学習しているのか、どの程度通訳方式をうまく活用できたか、どんな点を困難と感じているのか分析していく。教案を組み立てていく中で、問題点にどのように対処していったかについても述べる。

4.1 分析 1：11 課 Media Literacy

この課では、テレビ・新聞・雑誌・インターネットなどのマスメディアを通じて多くの情報にさらされている現代社会の様子について述べている。予習の段階で生徒が

困難だと感じた点について、以下の英文で分析していく。

[英文抜粋]

We often take it for granted that all the news stories we see on TV or in the newspaper are true. We imagine that the evidence and data are honestly collected, and that the story is reported in a balanced and objective way. But are the stories so reliable?

Read and compare the same piece of news reported in three or four major newspapers. You will often find that the same story is reported differently in each one: in the first it may be a major headline, in the second, just a few sentences, and in the third nothing at all. In other words, the news you read is carefully selected and controlled by the views and opinions of the editors or the newspaper companies.

[分析 1]

上記の英文を予習段階で読んでくる場合、何人かの生徒にとっては何が熟語で、どこが構文なのかがわからない。したがって、知らない単語を辞書で調べても内容がつかない。

次に、単語・熟語・構文は理解できたが、意味のまとまりがどこで切れるかわからない。

辞書を引くことでエネルギーを使ってしまい、内容把握まで手が回らない生徒がいる。

4.2 分析 2 : 11 課 Media Literacy

分析 1 の問題点の対策として、重要単熟語の 8 割は重要語句リストとして前もって予習プリントのなかに入れ、渡しておくことにした。空欄は自分で調べることにしている。また、さらに知らない単語があれば調べ追加しておく。ノートに、配布した重要語句リストを基に自分なりのボキャビルリストを作成させる。そのリストについて見ていく。

[重要語句リスト]

take it for granted that S V	~を当然のことと思う
evidence and data	証拠とデータ
in a balanced and objective way	バランスのとれた客観的な方法で
reliable	信頼できる
compare	[]
differently	異なって

in the first	[]
major headline	[]
in other words	言い換えると	
select	選ぶ	
control	統制する	
views and opinions	[]
editor	編集者	

[分析 2]

重要語句リストがあれば、すでに配布してある音声 CD を参考にし、予習段階で発音しながら単熟語を定着させることができる。

授業で行うペアワークでのクイックレスポンス練習の際、何を練習すればよいか生徒にとって明確になる。

クイックレスポンス練習では 3 つのルールを取り決めた。1 つは、息の合った相手とキャッチボールをするようにテンポ良く行う。2 つ目は、時間は 1 分ずつと定め、その間にリストの単熟語をほぼすべて網羅する。最後に、日本語から英語への練習に重点を置く。スポーツをするかのごとく楽しく、集中力も養成でき、単熟語の定着率はかなり高い。

4.3 分析 3 : 11 課 Media Literacy

分析 1 で指摘したように、なかには意味のまとまりであるセンスグループの理解が曖昧な生徒がいる。音声 CD を聞きながら、ポーズのところにスラッシュを入れる練習をしていった。センスグループが理解できているか分析する。

[英文抜粋]

We often take it for granted /
 that all the news stories we see on TV or in the newspaper / are true. //
 We imagine / that the evidence and data / are honestly collected, /
 and that the story is reported / in a balanced and objective way. //
 But are the stories so reliable? //
 Read and compare the same piece of news /
 reported in three or four major newspapers. //
 You will often find / that the same story is reported differently in each one: /
 in the first it may be a major headline, / in the second, /
 just a few sentences, / and in the third / nothing at all. //
 In other words, / the news you read / is carefully selected and controlled /

by the views and opinions of the editors or the newspaper companies. //

[分析 3]

約 80 パーセントの生徒が音声で英文を聞きながら意味のまとまりごとにスラッシュを入れることができる。

教材 CD は 120 wpm 程度の比較的ゆったりしたものだが、英語についていけない生徒もごく少数だがいる。英語力の問題もあるが、集中力が途切れていることもある。スラッシュを入れながら読んだり聞いたりすることで、かなり意識を英語に集中させることができる。

この段階で内容理解が大きくできている生徒を挙手で調べてみると半数以上いた。

4.4 分析 4 : 11 課 Media Literacy

次に、英文をセンスグループ単位で、与えられた語順のまま日本語に置き換える作業をどの程度できているか、生徒の予習ノートの訳語例で見てみる。

[生徒訳語例]

私たちは当然と思います /

私たちはしばしばテレビや新聞で見るすべての新しい話は / 事実である //

私たちは想像します / 証拠と資料は / 正直に集めている //

そして話は報告されている / バランスがとれ客観的は方法で //

しかし話は信頼できますか //

ニュースの同じ記事を読んで比較します /

3つか4つの大きな新聞で報道されている //

あなたは分かるでしょう / 同じ話が異なって各々の新聞で報告される //

はじめに / それは主要な見出しかもしれません / 次に /

2, 3 行だけ / そして 3 番目に / 全然何もありません

言い換えると / あなたが読んだニュースは / 注意して選ばなくてはなりません /

編集者または新聞社の目的や意見によって / 支配されます //

[分析 4]

ハイライトの部分が訳語として不自然な箇所だ。story は「話」と訳出する固定観念からなかなか抜け出せていないが、途中で「記事」だと気付いている。

新聞では「報告される」というより「報道される」と表現し、また、「主要な見出し」は「大見出し」という訳出が日本語として定着していることを理解していない。

長文の中に命令形が出てくると見落とすことが多い。

最後の文の訳出はスラッシュを入れているにもかかわらず、意味のまとまりが理

解できておらず、自分なりに解釈したため「読む記事は自分で選ぶ」としている。このレベルの英文であれば、語句リストがあるため、意味のまとまりごとに比較的 naturally 訳出していける。

4.5 分析 5 : 11 課 Media Literacy

分析 1 で取り上げた英文と比較すると英文構造が複雑になっている。精密な構文分析を据え、もう一方の極に文脈や常識を配慮する全体感覚を据えることが必要（柴田 2003）という通訳概念を踏まえたうえで、情報の流れ、指示語の解釈、英文構造の 3 点に視点を置き分析する。分析 5 では情報の流れについて見ていく。

[英文抜粋]

We may be aware that the world is too complex for the media to report the whole of a story, or even all the important stories. Therefore, we need to be careful when we watch TV or read the newspaper, and to remind ourselves that we are not getting the whole picture.

Perhaps you have heard the expression 'media literacy.' This means the ability to use the media as a tool, like language. In order to be 'media literate,' it is essential for us not to lose our identity. We need to be aware that there are lots of events the media is not reporting. There are opinions quite different from those reported in the papers. It is important for us not to just be a passive receiver of information, but to think about and investigate issues for ourselves, and to communicate our own ideas with others. Unless we do this, our society will lack diverse views and opinions. Moreover, we may come to think that the world presented in the media is the real world!

[分析 5]

英文は訳せたものの、著者の意図していることや全体の概要が生徒にとって理解できてないことがある。理由は 3 点考えられる。1 点目は、国語力不足。2 点目は、背景知識が理解できてない。3 点目に、内容を俯瞰しないで常に最初から一字一句訳していく習慣が英語学習を始めて以来ついている。

英文抜粋の枠で囲んである部分は思考の流れおよび情報の流れを指し示している。授業では「ディスコース・マーカー」と呼んでいる。上記の問題点に対処するため、ディスコース・マーカーに注目を払いながら段落単位で内容を大きく把握し、思考・情報の流れを読み取る訓練を行っている。このマーカーが順接なのか、逆説なのか、追加情報なのか、論点の転換なのか、理由を示しているのか、結論を導いているのかを理解することで思考・情報の流れの認知を容易にしている。

思考・情報の流れの認知がスムーズに行われているかどうかの確認として2点実施していることがある。1つは、パラグラフごとCDを聞かせ、日本語で内容に関する質問をし、日本語で答えさせていることだ。2つ目は、内容解釈をした後、ノートやテキストを見ないで日本語で要約を発表させる、またはペアワークで互いに発表し合うことだ。こうした一連の訓練を通し、顕在意識においても潜在意識においても、生徒は英文の全体像を掴もうとしていることがうかがえる。

4.6 分析6：11 課 Media Literacy

次に、分析5で取り上げた英文抜粋のハイライト部分である指示表現を考察する。

[分析6]

指示表現 *this* は前方照応関係にあることは現代文(国語)の授業でもなされており、ほぼ前文を指すと考えられることは理解している。

指示代名詞 *those* が既出の複数名詞を指すことは十分認識されていない。

代名詞 *it* は生徒にとって何を指しているか掴みにくく、内容把握をする時迷いやすい語である。前方照応関係と後方照応関係が存在するからだ。この指示表現に遭遇した際には以下の4つの場合を想定するように話している。

- ・ すでに言及した事物
- ・ 漠然とした事情・状況
- ・ 形式主語・形式目的語
- ・ 強調構文

辞書を引くと8通りの用例が列挙されているが、上に述べた4例で内容理解には十分である。項目が5例以上になると無限大に感じる生徒もいる。

4.7 分析7：11 課 Media Literacy

長い文や複雑な英文構造になると、どこまでが主語で、どの語が動詞なのかまったく理解できず、単語さえつなげない状況に陥る生徒が多い。ここでは2点に絞って分析する。分析5で抜粋した英文の下線部を考察する。

[分析7]

最初の下線部 *to* と2番目の下線部 *and to* だが、いずれも動詞 *need* の目的語の役割を果たしている。ところが *when* で導かれる副詞節が挿入されているため、離れた場所にあり気付きにくい。

3番目から最後の下線部 *to* までは not A but B and C の構文で、A でなく、B として C と文意が流れているが、文章が長く、構文を掴みにくい。

4.8 分析 8 : 11 課 Media Literacy

構造の複雑な英文を、センスグループ単位で与えられた語順のまま日本語に置き換える作業をどの程度できているか、生徒の予習ノートの訳語例で見てみる。

[英文抜粋]

We may be aware / that the world is too complex for the media /
to report the whole of a story, / or even all the important stories. //
Therefore, / we need to be careful / when we watch TV or read the newspaper, /
and to remind ourselves / that we are not getting the whole picture. //
Perhaps / you have heard the expression 'media literacy.' //
This means / the ability to use the media as a tool, / like language. //
In order to be 'media literate,' / it is essential for us /
not to lose our identity. //
We need to be aware / that there are lots of events / the media is not reporting. //
There are opinions / quite different from those reported in the papers. //
It is important for us / not to just be a passive receiver of information, /
but to think about and investigate issues / for ourselves, /
and to communicate our own ideas with others. //
Unless we do this, / our society will lack diverse views and opinions. //
Moreover, / we may come to think / that the world presented in the media /
is the real world! //

[生徒訳語例]

私たちは知っているかもしれませんが / 世界はメディアにとって複雑すぎて/
ニュースの間報道できない / すべての重要な記事でさえも//
それゆえ / 注意する必要があります / テレビを見る時、新聞を読む時 /
そして私たち自身に気付かせる時に / 全体像を把握してないと//
ひょっとしたら / 「メディアの読み書き能力」という表現を聞いたことがあるかもしれません//
これは / 道具としてメディアを使うための / 言葉に似た能力を / 意味します//
「メディアの読み書き能力」となる手段として / それは 私たちに不可欠です /
類似点をなくさないために//
私たちは知っている必要があります / たくさんのイベントを /
メディアは報道していないということを//
それは意見です / 新聞でそれらを報道したことによる完全に異なった
それは重要なことです / 私たちは無抵抗に情報を受け取る人に公平でないことは/
しかし私たち自身で問題を考えたり調べたり /

他人とアイディアを交換することが//
もし私たちが交換しなければ / 私たちの社会はいろいろな見解や意見が欠けるでしょう//
さらに / 考えるようになるかもしれません / そのメディアの世界が /
本当の世界になってしまうかもしれない//

[分析 8]

スラッシュ・リーディングで訳出すると「返り読み」をしないため、意味処理が速くできるようになっている。

センスグループごとに訳出する時、日本語として正しくするにはどのようにつないでいけばよいか分からない。

ハイライトの部分が訳語として不自然な箇所だ。分析 6 で述べたように指示語が何を指すか認識できていない。

分析 7 で見てきたが、英文構造が理解できていない。

whole を while と just を justice と取り違えている。

文脈に沿って identity を訳出できていない。このように日本語に置き換えにくい単語や多義語は 3 通りの対応訳がポン・ポン・ポンと即座に口をついて出るよう指導している。例えば:

identity	同一性・主体性・身分証明
figure	数字・姿形・人物
feature	顔立ち・特徴・特集記事
term	期間・間柄・用語
effect	影響・効果・結果
life	人生・生活・命

4.9 分析 9 サイト・トランスレーション

スラッシュ・リーディングでの訳出を基に、白文を見ながらサイト・トランスレーションの練習を行っている。「一人通訳」と称したこの活動は、声に出すことでテンポよく集中して練習できている。センスグループごとに訳出する時、日本語として正しく響くにはどのようにつないでいけばよいか分からない場合にも、とにかく声に出して一人通訳練習をするうちに自然な日本語で意味のまとまりごと訳出できるようになる。分析 8 の英文の冒頭を例に取ると、「気付いているかもしれませんが」といった具合に「が」を入れて訳出できる。正確に意味処理ができ、読むスピードも速くなっている。

4.10 分析 10 日英・英日サイト・トランスレーション練習

ペアワークで行う日英・英日サイト・トランスレーション練習では、一方の学生が

英語の白文を見ながらセンスグループごとに日本語に訳出していく、もう一方の学生が日本語を聞き英語に直す練習を行っている。家庭学習として練習しておき、授業では1人3分ずつ計6分実践している。スラッシュ・リーディング、一人通訳練習がしっかりできており、ペアを組む相手も同等の練習ができていれば、150語程度の英文で日英・英日両方の練習ができる。授業での評価としては3組のペアにクラスの前でデモンストレーションしてもらっているが、完成度の差が大きい。一人ひとりの学生が自分の意思で家庭学習を継続できるよう、評価方法の工夫、発表の場の提供など学習環境の整備が必要だ。

5. 通訳訓練法導入による波及効果

授業中に感じるクラスのエネルギー、引き締まった雰囲気、ペアワークであるクイックレスポンス練習、ウイスパリング練習での活気ある活動、そしてアンケート調査での前向きな反応より、通訳訓練法を利用した教授法が「波及効果」(Anderson & Wall 1993)をもたらしていることが考えられる。ここでは、意図した波及効果、偶発的波及効果、動機付けについて考察する。

5.1 意図した波及効果

通訳訓練法導入により意図した波及効果としては、自然な日本語で文頭から訳出していける、和訳を見ながら英語で再生できる、シャドーイング練習を通し英語のイントネーション、ストレス、リズム、ポーズを身につけるよう意識するようになったことである。また、日本語の大切さに気づく、集中力が養成される等が挙げられる。

5.2 偶発的波及効果

クラスルーム・エナジー (Brown, 2001) が満ちたこと、これが意図してなかった偶発的な波及効果だ。クラスに活気・活力・相互作用がもたらされた。そのため英語の授業を楽しんでいるようになった生徒が多い。ほとんどの生徒にとって初めて接する学習法であるが、声に出して英語を発し、英語に触れる機会が与えられることで英語の授業を楽しんでいる、あつという間に1時間の授業が終わると感じている生徒がほとんどである。理論で学ぶ言語形態に焦点を当てるというより、むしろ身体活動を通して意味を解釈することに焦点を当てることによって、学習者は自意識・ストレスから解放され、学習に没頭できる (Asher, 1977) ため、学習過程が無意識のうちに活性化されたと考えられる。現在の高校における多くの英語学習は、水の中で泳がせないで泳ぎ方の説明のみをするスイミングスクールのようなと日ごろより感じてきたが、通訳訓練法を導入したことで、実際に水中で水泳の練習ができ始めた実感する。

5.2.1 クイックレスポンス練習における偶発的波及効果

授業の初めに取り入れているクイックリスポンス練習は、重要単熟語を定着させるための方法として導入したものである。本来の通訳訓練法では、覚えたい語句をまとめてテープレコーダーまたは音声ファイルに収録し、日英・英日の即時転換練習を行っているが、授業ではペアを組み、時間も1分ずつに定めその間に重要単熟語をほぼすべて網羅する練習を行った。息の合った仲間とキャッチボールをするようにテンポ良くボールを落とさないで行うようにと指示している。楽しく取り組めるため導入に適しており、集中力も養成でき、何より単熟語の定着率がかなり高い。

これまで単熟語といえば文字情報として記憶させる傾向にあったが、文字と音声を連結させ、ペアで繰り返し練習することで、記憶への定着が確かになる。頭でのみ覚える作業から、体を使うスポーツトレーニングに類似した練習で単熟語を体得することができる。ペアワークとして行うため、相乗効果があり、反応スピードも高まる。さらに、対象となる単熟語がテキストの英文の中に出ているため定着がよく効果的だ。

言葉の多義性については考慮しなければならない点もあるが、相乗効果・集中力・反応スピード・体得・定着率を考えると波及効果は大きい。単語帳を暗記し単語力をつけるという従来の方法からの飛躍である。

5.3 動機付け

学習者に学ぶ目標をはっきりと示すことができるのが通訳訓練法だ。自分の技能よりもやや高い技能に取り組んでいる時、人は動機付けられるという“i + 1” (Krashen, 1985) の効果がこの訓練法導入によって見られた。第2言語習得において、態度と動機付けに関する調査研究はこれまで多くなされてきたが、それらの調査結果のほとんどが、積極的な態度と動機付けが第2言語学習の成功と関連していることを実証しており (Gardner, 1985)。通訳訓練法はこの観点からみてもさらなる発展を遂げるべき教授法である。

6. 高校での通訳訓練学習法の問題点

通訳訓練学習法は2年生を対象に行ってきた。しかし、3年生を教えるとなると全面的にこの学習法を導入できなくなってしまう。1つ目の理由は、大学受験に出題される抽象的で内容の複雑な論説文を扱うには時間がかかりすぎるからだ。2つ目の理由として、長い英語長文を短時間で読み、英語での設問に答える速読訓練には別の教授法と組み合わせの方がよいと思えるからだ。

6.1 大学受験への対応

センター試験の対策として600語から700語の英文のポイントを素早く読み取る能力が求められる。英語での設問に四択形式で内容の一致した英文を選択する問題が

5 題。そして本文の内容に合っている英文を 3 文選ぶ内容一致問題がある。80 分のセンター試験で、この物語文を読み解く長文問題は約 20 分で答える必要がある。生徒は英文を和訳する訓練をしてきているが、頭を切り換え、英語を読み英語で答える訓練も必要となる。

ではこの点に関してどのような対処法があるだろうか。まず考えられるのは、語彙力をつけ英文を読むスピードを上げていくことである。2 つの価値ある戦略として考えられるのは内容の大切な要旨を掬い取っていく *skimming* と、必要な情報をすばやく読み取る *scanning* が挙げられるが、同時に個々の英文を正確に理解しながら速く読む「早読み」活動を取り入れていく必要がある。平易な英文を和訳せずに理解することで、英文和訳から抜け出し、英語を英語として理解することが大切だとよく言われる。この見解には賛同できない点もあるが、授業の冒頭の 15 分から 20 分を利用して「早読み」活動を取り入れていくのは 1 つの方法だ。その際、通訳訓練法の語句のクイックレスポンス練習、スラッシュ・リーディング、シャドーイングは大いに活用できる。

次に、私立大学の英語の入試問題を分析してみると、出題形式はさまざまであるが共通しているのは、かなり難易度の高い論説文または評論文を読み、本文の内容に合っている英文を選ぶ内容正誤問題である。まず内容を母国語で理解する段階に時間がかかる。時には高校生にとって日本語での理解さえ困難と思える内容の英文もあり、まず生徒の国語力が問われる。

このような問題に対しては、母国語で多岐にわたる分野への知識や理解が必要となる。これまでの経験や生徒の意見により、英語の文章を通してかなりの分野に対する知識を得てその内容について考えるようになってくるといったことがわかった。英語に興味を持ち英文を読み進むうちに国語力がついてくるといった例も見られた。学校教育で触れる英語の量を増やしたい。そこで考えられるのが、「和訳先渡し方式」(金谷 2002) である。日本語訳を最初に配布し、それによって文章の意味を理解するために使われる時間を大幅に節約する。節約によって浮いた時間を使い、理解を深め英語の *intake* の量を増やそうという試みだ。

和訳先渡し方式の提案がなされる以前より、授業の前に全訳を渡しておく活動を取り入れていたが、予習の手を抜きがちになる、授業で集中力が欠けてしまう、といった傾向が見られた。この方式を授業に取り込むには、事前にタスクを考えハンドアウトを作成しておくことが非常に重要である。通訳訓練法と組み合わせることで従来の英語教授法からのパラダイムシフトが図れる。

6.2 日本語の活用

言語学習者の頭の中では、第 2 言語(以下 L2 と省略)での意味理解は第 1 言語(以下 L1 と省略)での意味理解と切り離しては存在し得ない (Cook, 1997b) ため、日本

人の英語学習者にとって L1 の果たす役割は大きい。日本人英語学習者にとって、日本語から英語より、英語から日本語へのパイプのほうが太いため、英語の学習をした際日本語が頭の中に残るのは自然なことだ。母国語のほうがそれだけ学習内容を長く効果的に保持できるということだ。

そこで、通訳訓練法、和訳先渡し法、仕上げは英語での output という組み合わせを提案する。もちろん母国語で取り込んだ知識・内容の土台が基にある。

では、高校における英語教育の目的は何か。現状では、「読み」が中心となり、内容が理解できれば終わりとしがちである。やはり英文を読む目的は、英文で input を与え、最終的には生徒の頭の中に英語を残し、いわゆる intake にまで高め、英語での output まで持っていくことだ。

7. 今後の展望

現在、通訳訓練法による言語学習を取り入れている高校は一握りであろう。これまで訳読方式からコミュニケーション中心の教授法まで、高校の英語教育の現場で試行錯誤を繰り返してきた。そのなかで通訳訓練法は母国語の力をつけ、英語で output まで高める、しかも英語のクラスに活力・エネルギー・相互作用をもたらす点で画期的な教授法である。今後さらなる発展を遂げる鍵を握っているのは通訳訓練法を担当する教員の養成にあると思われる。

また、高校3年間のシラバス、授業計画、CALL 教室での授業と、研究し実施していくべき課題は多い。本稿で述べたように、現在の日本の高校英語教育現場においては大学入試に生徒を合格させることが教師の一つの目標となり、生徒にとっても英語を学習する大きな動機付けとなっている。英語教師は、コミュニケーション能力を向上させることと文法訳読方式で教える 2 つの教授法の狭間でジレンマを感じている (Sakui, 2004) のが実情だ。通訳訓練法を学年に応じ、また目的に合わせ他の教授法と組み合わせ、語学指導していくことが求められる。高校英語教育のニーズに合わせるというよりは、むしろどんな生徒を育てたいかを念頭に置き、言語習得法の枠組み転換を図るフロンティア精神が必要である。

著者紹介： 越智 美江 (OCHI Yoshie) 聖カタリナ女子高等学校教諭。コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ修士課程 (MA in TESOL) 在学中。愛媛県および松山市の英語ボランティア通訳・ガイドとして、観光地のガイド県で開催された国際会議の通訳を務める

【註】

1) 2004年2月13日の TOEIC は、ニュージーランドからの留学生は受験していない。平

均点は 32 名の受験者より算出した。

- 2) 2005 年 1 月 22 日の TOEIC は、6 名の生徒は長期留学プログラム参加のため、2005 年 1 月 13 日に英語コミュニケーション能力判定テスト・CASEC を受験し、TOEIC に換算した点数で平均点を算出している。

【参考文献】

- Anderson & Wall (1993). Does Washback Exist? *Applied Linguistics*, 14, 115-129
- Asher, J. (1977). *Learning Another Language through Actions: The Complete Teacher's Guide Book*. Los Gatos, Calif.: Sky Oaks Production.
- Brown, H. Douglas. (2001) *Teaching by principles an interactive approach to language Pedagogy*. Second Edition. White Plains, NY: Pearson Education.
- Cook, V.J. (1997b). The consequences of bilingualism for cognitive processing. In A. de Groot & J.F. Kroll (Eds.), *Tutorials in bilingualism: Psycholinguistic perspectives* (pp. 279-299) Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Gardner, R. (1985) *Social Psychology and Second Language Learning: The Role of Attitudes and Motivation*. London: Edward Arnold.
- Krashen, S.D. (1985). *The Input Hypothesis*. London: Longman
- Sakui, K. (2004). Wearing two pairs of shoes: *Language teaching in Japan*. *FLT Journal* 58 (2), 155-163.
- 金谷憲 (2002) 『英語授業改善のための処方箋』大修館書店.
- 柴田耕太郎 (2003) 『翻訳力練成テキストブック』日外アソシエーツ
- 鳥飼玖美子 (1997) 「日本における通訳教育の可能性 英語教育の動向をふまえて」『通訳理論研究』第 13 号 : 39-52 通訳理論研究会

参考資料: 通訳訓練法を取り入れた授業について (アンケート)

A 一人通訳について

- 1 初めて体験した 経験したことある (いつ: _____ どこで: _____)
- 2 どんなところが難しいと感じたか
文頭から訳す作業
英文をみて日本語がすぐでない
その他 (_____)
- 3 効果
単熟語力がついた
文頭から訳すのに慣れた
早く英文が読めるようになった
わからない所がどこか、わかりやすくなった
意味の区切りが分かるようになった
その他 (_____)

B シャドーイングについて

- 1 初めて体験した 経験したことある (いつ: _____ どこで: _____)
- 2 どんなところが難しいと感じたか
聞きながら話す
正確に話す
スピードについて行く
英語を聞き取る
その他 (_____)
- 3 練習について
ほぼ毎日
週3回
週1回
授業のみ
- 4 効果
発音アクセントに気を配る
聞き取りやすくなった
スピードに少しでもついて行けるようになった
英語を声に出して話すことに抵抗がなくなった
発音が少しよくなったような気がする
その他 (_____)

C 通訳訓練法で学んでよかったと感じることを記入してください。

(_____)

ご協力ありがとうございました。

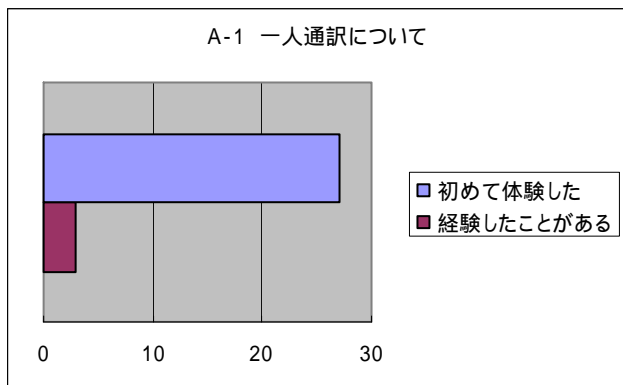


表 1 A-1 一人通訳について

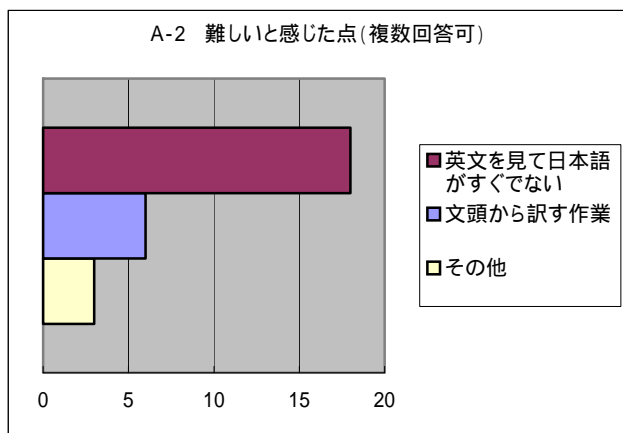


表 2 A-2 難しいと感じた点

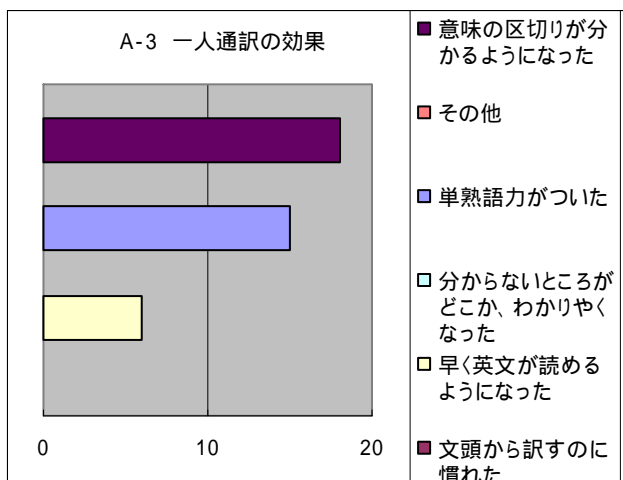


表 3 A-3 一人通訳の効果

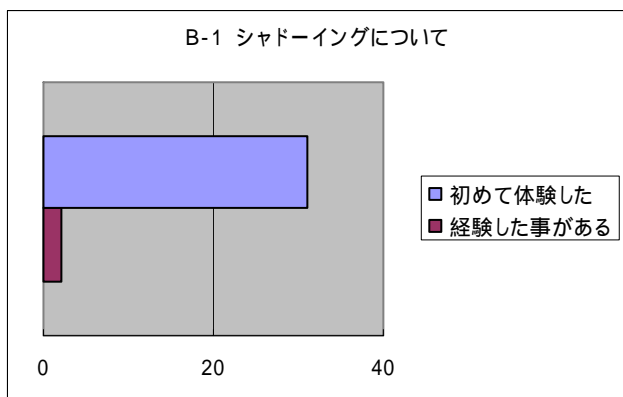


表 4 B-1 シャドーイングについて

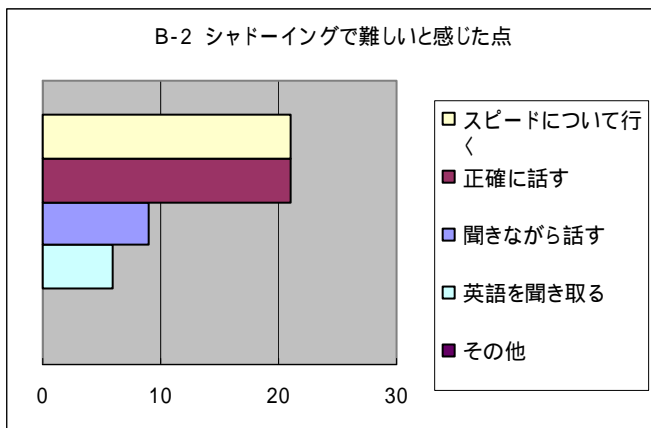


表 5 B-2 シャドーイングで難しいと感じた点

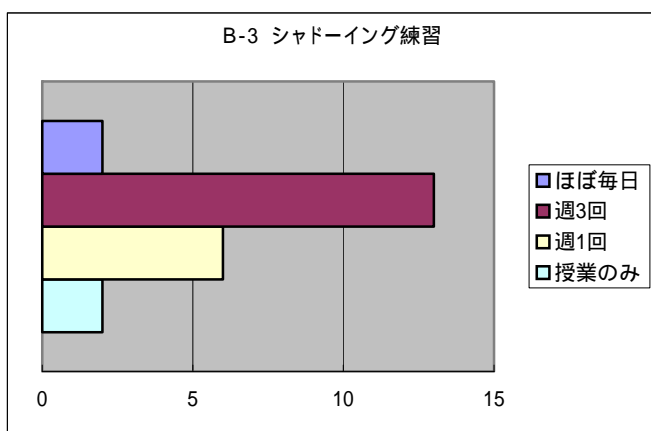


表 6 B-3 シャドーイング練習の回数

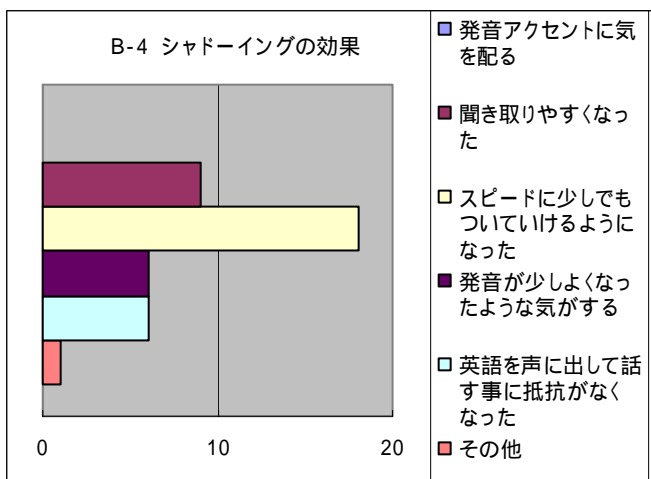


表 7 B-4 シャドーイングの効果